



1月7日
お田打ち (三嶋大社)



1月2日 初詣 (三嶋大社)



1月11日 どんと焼き (加茂川町)



12月19日
あかりの回廊 (三島駅)



1月10日
成人式 (市民文化会館)



1月14日 梅 (楽寿園)



12月8日 幼稚園フェア (大場幼稚園)



12月19日 山本昌邦さんによる子どもサッカー教室 (南二日町グラウンド)

三島のまつりの今 —オテンノウサン—

郷土資料館では現在、企画展

「三島のまつりの今」を開催しています。今回はその中から中郷地域で行われている夏のまつり「オテンノウサン」について紹介します。

愛知県の津島神社や、祇園祭で有名な京都の八坂神社に祀られる牛頭天王は疫病を防ぐ神として全国各地で信仰され、天王信仰・祇園信仰などと呼ばれています。

中郷地域の大場、梅名、安久、中島と函南町間宮の五地区では七月初めの土曜日にオテンノウサン（お天王さん）のまつりが行われています。特徴はその神輿で、派手な飾りはなく、小さな祠が綱目状の縄で固定されている独特の形態をしています。また、縄の太さや祠の固定の仕方に地区ごとの特徴があります。（写真①、②、③）



▲写真①安久の神輿



▲写真②大場の神輿



◀写真③中島の神輿

す。まつりの本番は夕方から夜にかけてです。半裸の男性が神輿を担いで地区内を回り、沿道から激しく水を掛けられるという荒々しいものです。

しかし、昔はもつと荒々しかつたようです。田畑や民家、商店にだれだれ込む、隣り村の神輿とケンカになる、巡回の最後に神輿を川に投げ入れて自分たちも飛び込む、など力が入ったまつりでした。

安久では特に激しくなりすぎたため明治初めころ、中止にさせられました。その後、昭和五十七年（一九八二）有志の保存会により復活することができました。

現在ではケンカもなくなり、川

に神輿を投げ入れているのも間宮だけとなっています。大場と間宮では数年前に偶然、神輿が出会いました。これをきっかけとして、それからは毎年、場所と時間を合わせて合流し、大声を上げて激しく神輿担ぎを競い合っています。これがケンカになるようなことはないようです。（写真④）



▲写真④大場・間宮のオテンノウサンの様子

以前は青年団がまつりを担っていました。地区の青年団がなくなつて久しい現在では有志による保存会、町内会、町内会の中の当番組など担い手も地区によつてさまざまです。また、地区ごとの独自の神輿のつくり方を伝承しているために大場の「縄からげ保存会」、中島の「伝統芸能保存会」といった独自の会が作られている地区もあります。

企画展「三島のまつりの今」は四月十日(日)まで、楽寿園内郷土資料館で開催しています。



二島の村名④
青木
(中郷地区)
御嶽神社

青木の交差点近くに鎮座する御嶽神社は、「親子モツコク」（県指定天然記念物、御神木）・為朝像版木（市指定文化財、鎮西八郎為朝が彫られた護符用の版木）などがあることで知られています。

同社は現在、主祭神大日靈尊（天照大神の別称）のほか、鎮西八郎為朝公・藤代大神・金山彦命・中津少童命・須佐男命・倉稻魂尊の六柱の神様を合祀しています。明治八年（一八七五）まで、前三柱は八郎社・藤代社・金山社として境外に、後三柱は床浦（徳浦）社・八坂社・稲荷社として境内にそれぞれ別々に社を設けて鎮座していました。しかしそうした状況は祭祀などの実施に不便が多かつたため、氏子一同が熟議し、足柄県に届け出て、すべて一所に合祀する現在の形態に至つたようです。



▲『神社明細帳』掲載指図（明治7年（1874）作成、館蔵）